

## 病害虫発生予察特殊報 第3号

作物名：トマト

病名：トマトすすかび病

病原菌：*Pseudocercospora fuligena*

### 1 発生確認経過

本年9月、東信地方のトマト栽培施設の葉かび病耐病性品種「麗容」において、葉かび病に似た病斑が確認された。

長野県野菜花き試験場佐久支場で病原菌の同定を行ったところ、*Pseudocercospora fuligena*と同定され、本病はトマトすすかび病であることが判明した。

本病は、平成8年に宮崎県で発生が報告されて以来、26府県で発生が確認されているが、長野県では初確認である。

### 2 病徴及び被害

- (1) 本病は葉に発生し、初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のカビを生ずる(図1)。病斑は次第に拡大し、病勢の進展とともに円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色から黒褐色に変わる。
- (2) 葉表には、やや遅れて葉裏と同様の病斑を生ずるが、葉裏より少ない。
- (3) 被害葉は早期に垂れ下がり、乾燥して巻き込んで、全葉が濃緑褐色のカビで覆われる。
- (4) 病徴は葉かび病(図2)に類似しており、肉眼での判別は困難である。



図1 すすかび病の病徴



図2 葉かび病の病徴

### 3 病原菌と発生生態

- (1) 本病原菌は、被害葉などの残渣とともに越冬し、翌年の伝染源となる。
- (2) 多湿条件で発病しやすく、密植・過繁茂・換気不十分の施設栽培で発病しやすい。
- (3) 糸状菌の一種で、菌糸の発育適温は26～28℃、分生子の発芽適温は26℃付近である。
- (4) 分生子は細長い糸状であり、形態で葉かび病菌と区別できる(図3・図4)。
- (5) 本病は品種の葉かび病耐病性に関係なく発病し、葉かび病と混発することもある。



図3 すすかび病菌の分生子

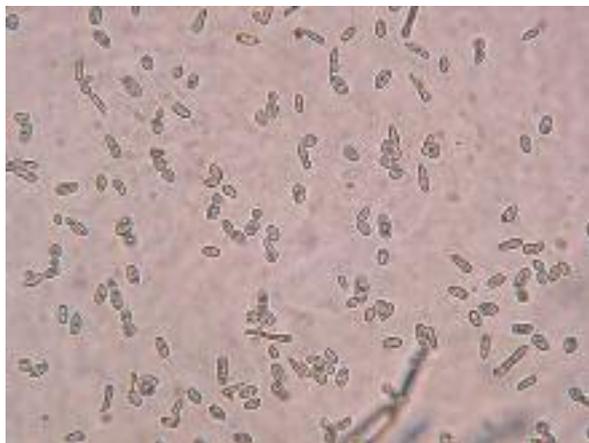


図4 葉かび病菌の分生子

### 4 防除対策

- (1) 葉かび病防除の行われていない有機・減農薬栽培では、発生する可能性がある。
- (2) 発病葉、被害残渣は伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (3) 多湿条件で発生するので、密植・過繁茂を避け、換気による湿度管理に留意する。
- (4) 本病を対象とする登録農薬は以下のとおり(表1)。なお、Zボルドー以外は葉かび病にも登録がある。

表1 (参考) トマトすすかび病に対する主な防除薬剤と使用基準

薬剤名	一般名	希釈倍率	使用時期	使用回数
アミスターオブティフロアブル	アゾキストロリン・TPN	1000倍	収穫前日まで	4回以内
スコア顆粒水和剤	ジフェノコザール	2000倍	収穫前日まで	3回以内
ダイアメリットDF	イミダクワゾール <sup>®</sup> 硫酸塩・ポリリン	1500倍	収穫前日まで	3回以内
ダコニール1000	TPN	1000倍	収穫前日まで	4回以内
トリフミン水和剤	トリフルコザール	3000倍	収穫前日まで	5回以内
ブリザード水和剤	アゼキニル・TPN	1200倍	収穫前日まで	3回以内
ベルコートフロアブル	イミダクワゾール <sup>®</sup> 硫酸塩	2000倍	収穫前日まで	3回以内
Zボルドー	銅	500倍		

JPP-NET農薬登録情報 10月16日確認

TPN(有効成分毎)の使用回数に注意する。TPN6回以内(但し、土壌灌注は2回以内、散布及びくん煙及びエアゾル剤の噴射は合計4回以内)

長野県病害虫防除所  
 所長：平井尚之  
 担当：武井正明  
 TEL：026-248-6471(直通)  
 FAX：026-248-6473  
 E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp